

飯島賢二の『恐縮ですが...一言コラム』

第 406 回 「むかん族」を狙い撃ち！

2011.2.27

「今時の若手社員の中には、およそ宇宙人みたいな連中がいる」...
先日、某クライアントと決算の打合せをしている時の、雑談である。
「何を言っても反応がない、イヤだったいや、ダメなら駄目と言えればいいのに、何もかえってこない。無関心、無感動、無関係と、まったくシラケ切っています。」
なるほど、社長さんの「嘆き節」も解らない訳ではない。

この連中、「むかん」だから、小生密かに、「むかん族」型社員と呼んでいる。
サークル活動にも参加せず、ただ何となく出勤してくる輩である。
「たまには一杯行こうか！」と誘っても「今日は結構です」と冷やかに断られてしまう。
隣りの同僚が必死に締め切りに追われているのに、見ようもしないで「お先に失礼します」と帰ってしまう。そう、きっとあなたの近くにも繁殖しているはずである。
最近の若い社員に多いタイプとも言える。

こうした社員が出てくる背景は、どこにあるのだろうか？ そんなことを考えてみた。
この子達が育ってきた社会は、間違いなく情報過多で、テレビ時代の落し子といえる。
ネットや電波の世界では、これでもか、これでもかと情報を押し付けてくる。
本来、今までの人間の行動は、「何か欲しい...」「何かをしたい...」と言う自らの欲求から始まっていた。その欲求は強ければ強いほど、高ければ高いほど、その実現を目指し、努力をする...そんなプロセスが当たり前だった。

彼ら「むかん族」にも、欲求はあるのだろう。しかし、その実現までのプロセスが全く違って来た。モノは溢れ、情報は捨てるほどあり、チャンスは待たずして向こうからやってくる。育ってきた家庭環境も、ゆとり教育のペット化状況で、何でも求めずして、自動的に与えられて来た。ゆえにたぶん、待ちの姿勢が当たり前になっているのかもしれない。また、自分を仕事の渦中に置かず、常に批判的に見る態度。
平和ボケした危機感の無さから、
「何でそんなことするの？」とは、彼ら「むかん族」の定番 Question となっている。

それではどうすればこうした社員を活かせるか？
むかん族社員には、きまりきった日常の仕事、つまりルーチンワークよりも、比較的短期的で結果の出る仕事を与えるようにしたほうがベターかもしれない。
小さな仕事の成功体験で、本人に関心と感動を覚えさせる...そんなやり方である。
次に大きな仕事を持たせ、他との関係などに気を配らせる。
そんな経験を重ねる過程で、仕事に対する責任感、チームワークの重要性、自らの使命感と向上心を養いさせ、お客様から感謝を頂くことの有難さを実感させていく、こんなプログラムを用意してあげるべきかも知れない。

正社員として雇用した以上、育てないと意味が無い。駄目だ、駄目だと叱っていただけでは、全く解決にはならない。お互いにため息ばかりでは、精神衛生上も良いはずがない。
冒頭の社長さんではないが、「むかん族社員」は決して宇宙人ではない。心が通じ合える隙間が、必ずあるはずだ。そこを狙い撃ち！ 明日から実践してみようと思っている。